

学会企画講演

非認知能力

——教育は遺伝に勝てるのか？——

- 企画・司会 : 高橋雄介 (京都大学)
企画・司会 : 小塩真司 (早稲田大学)
講演 : 安藤寿康 (慶應義塾大学)
指定討論 : 中室牧子 (慶應義塾大学) #
指定討論 : 森口佑介 (京都大学) #
指定討論 : 山形伸二 (名古屋大学)

企画趣旨：

近年、個人差の形成における「非認知能力」およびその発達の基盤に対する関心が急速に高まっている。いわゆる非認知能力（学びに向かう態度、やり抜く力、自己制御、協調性など）は、学力や人生満足度、職業的成功といった多様なアウトカムと密接に関係することが多数の研究で示されており、国内外の教育実践や教育政策においても、その重要性が高まりつつある。

本講演では、『教育は遺伝に勝てるのか？』および『能力はどのように遺伝するのか—「生まれつき」と「努力」のあいだ』などの著書を通じて、行動遺伝学の視点から、教育と能力形成の関係を鋭く問い直してきた安藤寿康氏（慶應義塾大学名誉教授）をお招きする。非認知能力の形成における遺伝的要因と環境的要因の相互作用に焦点を当てつつ、行動遺伝学の知見が教育的介入の可能性や限界をどのように照らし出すのかについて、ご講演をいただくとともに、参加者との議論を深めることを目的とする。

安藤氏は、ご著書において、非認知能力の個人差のおよそ半分は遺伝で説明できることを示す双生児研究の成果を多数紹介しているが、これらの知見は、教育には意味がないという結論を導くものではない。むしろ、個性を尊重し、自己理解を促進する教育のあり方を考えるうえで、行動遺伝学のエビデンスがどのような貢献を果たしうるのかを示すものである。このような立場は、教育における可塑性や科学的根拠に基づく個別化教育支援の重要性とも深く共鳴する。

より具体的には、本講演では、非認知能力がどのようなメカニズムで発達し、遺伝および環境要因がそれぞれどの程度関与するのか、行動遺伝学の知見は教育の可能性と限界にどのような視座を与えるのか、また、遺伝的個人差を前提とした上で、公教育においてどのように包摂的かつ実効性ある支援が実現されるのか、といった論点を中心に検討を行う。

さらに本企画では、教育経済学（中室牧子氏）、発達心理学（森口佑介氏）、パーソナリティ心理学（山形伸二氏）の各分野から専門家を招き、非認知能力の発達と教育実践に関する最新の知見と見解を持ち寄り、多角的な視座からの議論を展開する。本企画は、非認知能力という現代的なテーマをめぐって、教育と遺伝・環境の関係を科学的に捉え直す契機となるとともに、教育心理学的観点から、今後の教育実践や教育政策の立案への理論的・実証的貢献を目指すものである。